

47 口内炎の病因に関する変遷

西巻 明彦

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所

日本歯科大学新潟生命歯学部 医の博物館

とを指摘しているが、口内炎についての記載は少いが特徴的である。

口内炎は、口腔粘膜、歯肉、舌面に糜爛や潰瘍を形成する疾患で、原発性と症候性があり、原発性口内炎には、カタル性口内炎、潰瘍性口内炎、壊疽性口内炎、アフタ性口内炎などがある。十六世紀のパラケルススは、加熱した水銀などを用いる作業をしていると歯痛がおきることがあることを記していることから、鉍毒によっておこる汞毒性口内炎について認識していた可能性がある。十八世紀のフォシヤールは、『歯科外科医』の中で、自から処方した水薬で、歯肉や口唇内側に生じた口内炎や潰瘍を一日四、五回擦り込めば治癒し、また口臭をも軽減することを述べている。『歯科外科医』の中で、フォシヤールはう蝕については多くのページをさき、砂糖入りの食物は歯の崩壊に関与しているこ

一方、中国伝統医学において、口内炎にあたるものは、口瘡で総称されているが、他に部位により、舌瘡、口舌瘡の用語がある。口瘡は、現代中医学において、口瘡、口了瘡、口糜、口疳、鵝口瘡などに分類され、一般的には脾胃の熱によるものが多いと言われている。口瘡について最初に記載された書物は『内経素問』で、その気交変大論に、「上辰星に應じ丹穀成らず。民病めば口瘡たりて、甚だしければすなわち心痛む」、五常政大論篇に、「少陽司天なれば、下記下臨し、肺気は上に従い、白起こり金用き、草木に告ありて、火見れて燔炳し、革金まさに耗人として、大暑以て行り、咳・嚏・軌・衄・鼻室・口瘍、寒熱・腑腫あり。風は地に行りて、塵沙飛揚し、心痛み、胃脘痛み、厥逆し、鬲して通ぜず。その主は暴速なり。」と述べ、五運の気の変化による自然災害から、口瘡が出現することを記している。『金匱要略』の百合狐惑陰陽毒病脈証并治第三に、「狐惑の病たる状傷寒の如く黙然として眠らんと欲

し、目閉づるを得ず。臥起安からず。喉を蝕すること
を惑となし、陰を蝕するを狐と為す。飲食を欲せず、
食臭を聞くを悪み、その面目乍ち赤く乍ち黒く乍ち白
し。上部を蝕すれば声喝す。甘草瀉心湯之を主る。」と
述べ、熱毒が上下を障害することにより、口瘡が発生
することを述べている。『医宗金鑑』には、「狐惑とは
牙疳下疳等の瘡の古名なり」と記している。口瘡の病
因について、くわしく述べられているのは、『諸病源候
論』唇口病諸候で、「手の少陰は、心之経也、心気は舌
に通ず。足の太陰は脾之経也、脾気口に通ず。臟腑熱
盛で、熱心脾に乗じ、氣口舌に衡りて、故に口舌に瘡
を生ぜしむ也。」と、心脾の熱が口瘡の原因であること
を示している。このことは、心脾の熱が原因というこ
とは、上焦のみならず中焦にも原因があることを指し
ている。『聖濟総録』口齒門においては、熱が原因にお
いてのみならず、中焦の寒冷でも発症することを述べ、
『濟生方』口齒門では、口瘡の主因は内因で、外因の風
熱はあくまで誘因であることを指摘している。元代の
『丹溪心法』では、中焦土虚で発症することを記してい

る。明代の薛己は、『口齒類要』口瘡の中で、「口瘡は、
上焦の実熱、中焦の虚寒、下焦の陰火、各経伝変して
致す所をまさに分別して之を治すべし。」と、口瘡の病
因を上焦、中焦、下焦に分類して、その治法を記して
いる。中国伝統医学において、その病因は時代が下る
につれ、上焦から中焦、下焦へと拡大していくことに
特徴があると考ええる。

中国伝統医学は、口瘡の原因を内因とする概念が強
く、一方、西洋医学は口内炎の原因を近世に入り、ヘ
ルペスウイルスなどの外因に求める傾向が強いと考え
ることが出来る。今回、口内炎の病因について、西洋
医学と中国伝統医学との比較対照を行い、考察を行っ
た。